法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

介護福祉職の独自性を活かしたケア・アセスメント用紙(案)の開発(福祉社会専攻,修士論文要旨(2005年度修了者))

山本, 章

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
56
(開始ページ / Start Page)
281
(終了ページ / End Page)
281
(発行年 / Year)
2006-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020750

＜福祉社会専攻＞

『介護福祉職の独自性を活かしたケア・アセスメント用紙（案）の開発』

山本　章

介護福祉職の独自性を反映できる「ケア・アセスメント用紙（案）」を開発することを目的とし、1．介護福祉職独自のアセスメント用紙の必要性及び使用の実態、2．介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙（案）」の作成、3．介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙（案）」の有効性についての具体的な目的で実施した。

1．介護福祉職独自のアセスメント用紙の必要性及び使用の実態

「必要性」については19名のうち18名（94.7%）の人が必要とし、「有無」については、19名のうち17名（89.5%）が無いと回答をしていた。アセスメント方法の現状については、約9割が主にケアマネージャーの情報を用い、独自のアセスメント実施は約1割であった。

2．介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙（案）」の作成

1）アセスメント用紙の内容・項目の決定は、資料・文献および介護の実践場面の調査から収集した。その結果、ADLの8つの動作群【食事動作】【排泄動作】【入浴動作】【整容動作】【更衣動作】【起居動作】【移動・移乗動作】【コミュニケーション】を基本とすること、及び、介護実践場面における独自のアセスメント視点を盛り込む必要があることが明らかになった。

2）作成したアセスメント用紙(案)は、動作群ごとにまとめたシートと、介護実践上必要な医学・生活・意識等に関わる状況をみる【全体状況】の合計9枚を作成した。

3）介護福祉職の独自性から見たアセスメント内容の特徴としては、介護福祉職の特性である生活実践の場で求められる独自の内容があり、それは、生活の流れの中で不可欠な要素であることから、独自の技法として強調されるべきものとして採用した。

4）アセスメント用紙に採用した介護福祉職に必要な独自の視点としては、A介護の場所、B介護に必要な準備作業、C介護技法に必要な使用器具等、D介護技法提供時の本人の姿、E本人の主体性・精神心理面に関わる配慮や特性、F「準備・動作・後片付け」の自立度、G動作・行為分析から得られた細項目の自立度、H「必要な部分介助」を明記、Iその動作の介助の時間帯や習慣、Jその動作．行為上の着眼点、K日内変動、日差変動の有無、L声掛けやその他の特記事項の記載欄を多く設置、12項目である。

5）「ケア・アセスメント用紙(試案)」を用いた一次調査を12名の介護福祉職において実施。その結果、11名は肯定的評価であった。一方、問題点や改善点は＜項目が多く見づらいため、まとめや整理が必要＞、＜自由記載を増やした方が良い＞等10項目の修正案が出された。また、各動作別のアセスメントについても追加修正意見が出された。

6）一次調査の結果を受けて、9種のアセスメント用紙の追加修正、整理を行い、「ケア・アセスメント用紙（案）」を作成した。

3．介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙（案）」の有効性

1）介護福祉職3名を対象にした予備調査の結果、追加修正意見が出なかったために、「ケア・アセスメント用紙（案）」を完成とし、これを用いて、二次調査を実施した。

2）30名の介護福祉職員に「ケア・アセスメント用紙(案)」を試用してもらった結果、24名（80.0%）が介護実践現場で役立つと回答していた。

3）役立つと回答した24名の介護福祉職員より出された活用の可能性は、多い順から、＜ケアプランの立案＞100.0%、＜新人及び新しい担当者への引継ぎ＞95.8%、＜介護問題（課題）の明確化＞95.8%、＜自らの介護技法の確認＞95.8%、＜自立支援の視点の明確化＞95.8%、＜細部に亘るケア技術のポイント確認＞91.7%、＜利用者に適合した留意点の把握＞91.7%、＜介護の研究的視点＞91.7%、＜臨床実践現場におけるミスの減少＞87.5%、＜ケア技術の効果判定＞79.2%、＜利用者の生活姿勢（主体的・自立志向性・依存的）の変化の把握＞75.0%、＜状態の変化への素早い適切な対応＞75.0%、＜仕事の効率性＞75.0%、の13項目であった。一方、介護福祉職員の活用の可能性の否定等意見として、重複回答で、“分かりにくい”、“評価用紙の不備”の意見が4人、“記録・評価に時間がかかる、ゆとりがない”が7人であった。

4）介護福祉職30名より、記入された自由記述式回答を整理した結果、22項目［良いとする点12項目、問題点・追加修正・改善点10項目］の内容に纏められた。

＜臨床心理学専攻＞

『乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響』

阿部哲郎

【問題と目的】

移行対象とは、Winnicott,D.W.（1953）が用いた言葉で、乳幼児が肌身離さず持ち歩き、特別な愛着を寄せる「自分でない」所有物（毛布やぬいぐるみ等）を指す。また、Winnicottは、移行対象はほど良い母親が存在する上で発現すると主張した。

浅川ら（2002）は、母親から理由もなく避けられることからくる不安を感じることなく育った男子青年は、自己愛傾向が高くなると述べている。宮下（1991）は、女子学生の場合、母親の暖かい受容的態度が自己愛傾向を抑制し、否定的な養育態度は自己愛傾向を増長させると報告している。そして、Barkin,L.（1978）は、移行対象が自己愛から抜け出すことを助ける機能を持っていると述べている。

本研究では、「乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響」について検討することを目的とする。そこで、移行対象の認識を、先行研究で特に重要であるとされた、「移行対象の認知」と「移行対象の記憶」とに分け、移行対象を所持していたことの認識の違いによって、自己愛傾向への影響に差異が生じるのかを見ていく。そして、移行対象を所持しなかった場合には、遠藤（1989）が主張した移行対象が発現しない2要因、すなわち、乳幼児が成長しても母子関係が濃密で、分離